

**立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金  
企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2017年度研究成果報告書**

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	スポーツウエルネス・3	佐々木綾乃 印
指導教員	所属・職名	氏名
	スポーツウエルネス	松尾哲矢 印
研究課題	2020年度東京パラリンピック支援に向けた障がい者スポーツボランティアの課題と方法	
研究年度	2017年度	
プロジェクト 分担者	大島菜月、小松恭子、近藤寛海、齋藤匠馬、清水晃哉、高柴裕、蓮井千那魅	

**プロジェクトの内容及び成果の概要**

私たちは、この半年研究してきた障がい者スポーツという観点から 2020 年に開催を控えた東京パラリンピックにボランティアという立場に興味を持ってもらいたいと考え、今回講習会を開くこととした。講師は立教大学院卒のパラリンピアンである千葉祇暉さんをお迎えし、全 3 回（11 月 30 日、12 月 14 日、1 月 11 日）の講習会を行った。

初回ではそもそも障がい者についてということ、私たち健常者の思う常識や日常と障がい者の思うそれらはどのように違うのかをグループワークなどを通して学んでもらい、2 回目では生活の中での支援を、3 回目ではスポーツの中での支援を、実際に車いすに乗って困難な場面を体験したり、車いすに人が乗った状態における支援を体験したりし、学び考えるプログラムとした。

講習会の対象についてはパラリンピック開催時に大学 4 年生で時間に余裕があり、実際に参加が見込めるであろうということで、スポーツウエルネス学科 1 年生を対象とした。実際の参加者はスポーツウエルネス学科以外の所属の方や、学年も 1 年生から 4 年生、また院生の方まで幅広く参加してもらうことができた。

参加者の障がい者へのイメージとしては、マイナスなイメージが多かった。例えば、初回のグループワークでは、日常生活は暮らしにくそうであるとか、お互いに手伝いが必要な場面で声がかげづらいであるなどの意見が、また参加者の感想にも車いす利用者へ介助を申し出る勇気が持てないなどの意見が多く聞かれた。

それが 3 回の講習を経て、実際に車いすに乗る体験も行ったことで、より一層バリアフリー化の重要性が感じられたという意見や、どのような場面で困難があるのか体感できたので必要な場面に出会った場合には積極的に声をかけたいという意見、サポート時のコミュニケーションの重要さがわかったという意見が多く聞かれ、初めに「分からない」という不安から生じていた支援に対しての「不安」や「恐怖」が講習を通じ確実に減少し、参加者にとって、また支援を必要とする障がい者にとって有意義な講習になったのではないだろうか。

また全講習会終了後のアンケートでは、今後このような講習会で学びたい内容についてという質問に様々な意見を出してもらうことができ、この質問に対し、多く意見が出るということが興味を持ってもらえた証左と言えよう。また、再びこのような機会に恵まれた場合には参考にしたい意見が多数見られた。また今回のテーマであるパラリンピック支援、障がい者ボランティアという観点から見ると、パラリンピックやボランティアへの関心が高まったかという質問に対し、全員が肯定的回答。参加して新しい気づきがあったかという質問に対しては、全員が非常にそう思うと回答。これらの結果から全体を通し、テーマに対し効果的な講習会になったといえるプロジェクトとなったものと考えている。